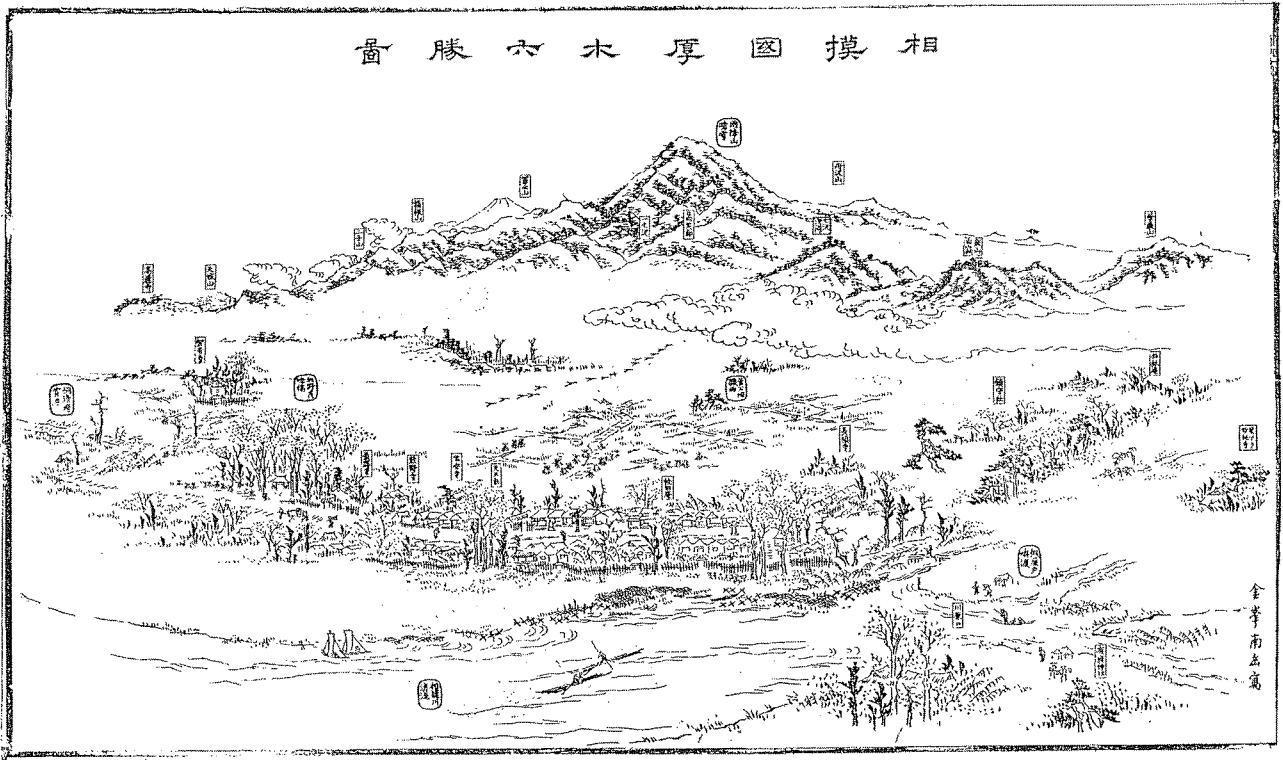


# 厚木市史たより

第2号

平成23年7月1日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。



「相模国厚木六勝図」(弘化～嘉永頃 1844～1853年) 縦 35.5 cm × 横 65.4 cm (飯田 道子氏蔵)

『厚木市史』近世資料編(3) 884頁 (876頁「厚木六勝」解説)・『同書』近世資料編(6) 113・272頁部分収録

## 「相模国厚木六勝図」

「金峯南岳写」昨非居士齋藤鐘識 齋藤利周捐資刊之」の木版摺です。末尾の齋藤鐘の識語によれば、厚木を訪れた文人墨客の厚木六勝(雨降山晴雪・相模川清流・飯屋戸喚渡・熊野森暁鴉・普公祠驟雨・桐辺堤賞月)の詠歌が既に百篇になったということです。

私財を投じて本図を刊行した齋藤利周は、厚木村商人で六代目齋藤八兵衛。文久二年(一八六二)二月六日没。享年六十四歳。齋藤鐘輔(名利鐘、字萬鈞、号昨非)は弟にあたるといひます。また、嘉永六年(一八五三)序の漢詩集『湘雲一朶』にある「國島緝、字彦明、号春翠、昨非兄」の記載により、もう一人の兄弟国島氏の存在が確認できます(飯田孝「厚木六勝の撰者齋藤鐘輔をめぐる人々」『県史談』29号)。

今回発刊の『厚木市史』近世資料編(6)収録資料一章84「厚木村近江屋葉種店藤川清七覚書」のうち万延元年(一八六〇)十一月店開き祝儀、近所・組合配り物の項では、「下隣り國島彦八(前述の國島緝か)・名主役非番才藤八兵衛・手習師しよう山本鐘助」の三人が並んで記述され、『同書』には、商人である齋藤八兵衛(店印㊦)や国島彦八(店印㊧)が確認でき、厚木の商人はこの地方の文化の担い手でもありました。

本図は、当時の厚木の豊かな物資流通や、人々の活発な交流のうえに成立した厚木六勝図なのです。

(厚木市史編さん嘱託員 石川鹿奈子)

# 『厚木市史』近世資料編(6)について

海老名市史編集補助員 片山 兵衛

『厚木市史』近世資料編(6)村々と生活が刊行されました。ここに、全六冊、合計六千四百頁をこえる近世資料集が完結しました。特に本書には、隣市の住人である私にとつても興味深い資料が多数掲載されています。今後、厚木市民の方々の幅広い活用で貴重な文化遺産になることが期待され、その事業に敬意を表したいと思います。

本書は全五章、総計五〇〇点近い資料で構成されています。章ごとに二、八の項目を設け、商人・職人の活動、水運や道路による物流流通、多様な生業、幕政との関わりなど、中央から他県のものまで、様々な資料が広く収録されています。

誤りを怖れずにいえば本書の面目は、厚木を舞台にした多彩な人と物の移動や活動と、それを支えた水運・街道の有様を描くところにあります。個別の資料紹介は紙面の都合上はぶきますが、特に気づいたものを取り上げて、本書の素晴らしさの一端を紹介できればと考えています(以下、各章のカッコ内の数字は資料番号を示す)。

江戸の空気が色濃く残る明治二年二月、北方探検で知られた松浦武四郎が厚木を訪れ

した。その時の記録で「厚木宿 馬継・茶店・旅籠や有。三千軒の市町にして豪商有。惣じて生糸・真綿類をあきなふ家多し。また川船も町の下に着きて妓等も有よし。別して大山比には盛なりとぞ聞り(以下略)」「東海道山すぢ日記」富山房刊『松浦武四郎紀行集』上所収一九七五)と伝え、新時代を迎えたにぎわいぶりを簡潔に描いています。本書にはまさにそのような厚木の姿をより詳しく知る手がかりが多数集められています。

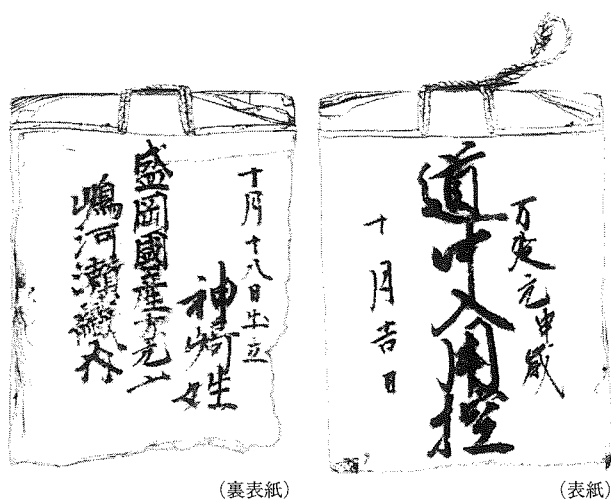
**第一章「厚木と相模川」**では厚木の広域性が描かれています。すでに十七世紀後半、宿場町・商人町として発展していた市域は厚木町と呼ばれ(10)、遠方からの訪問者がありました。商人ではとりわけ近江出身の人たちが大勢訪れています(6)、その一方で異郷に客死した厚木住民も多数にのぼるようです。四章で触れますが、信州からの石工の出稼ぎも見られました。来訪した僧侶の出身地は奥州から九州まで広範囲の分布であり(16)、警女や座頭など、漂泊者の姿も見えています(19)。また全国から大量の物資が流入し(121)、商家の並ぶ矢倉沢往還の一角は活気に満ちていました。その雰囲気は有名な渡辺崋山の「游相日記」の筆が伝えています(29)、何といつても精彩をはなっているのは、慶応年間の商家の手代が残した日記です(59)、この記録は

武家とは異なる視点で記され、晴雨の記事は商人でも天候に深い関心をよせていたことを教えてくれます。さらに時節柄、来訪した外国人に関する記述や将軍の動向についての噂話は当時の庶民の意識をよく示し、使用人や病気に関する述懐は内面に迫って面白い内容になっています。三田村で採集された「木流し唄」は労働歌という、聴覚にうったえる資料で(109)、一七〇もの商標のコレクションである「商人印判鑑稿」(164)はF・ベアトの口絵写真などと並んで楽しい視覚資料です。

**第二章「道と交通」**には、厚木の動脈ともいべき街道についての資料が並びます。幕末期には動揺する政情を反映して、東海道の品川・平塚間を矢倉沢往還の青山・厚木・平塚に変更する計画が立てられました(8)。計画は実現しませんが、この事実は市域が重要拠点の一つであることを幕府が十分認識していたことを示しています。江戸後期には伊勢参りなどと並んで、相州の大山参りも人々の大きな娯楽になりました。参拝者たちは大山道を経て登拝しました。その際、「道中記」という案内書が多数印刷されましたが、それらには市域の定評ある宿がみえています(16、20)。さらに坂東・秩父札所順礼などに関する資料(49・50・53、57)には、当時の人々の願いや祈りの姿がよくうかがえます。

こうした庶民の移動とは別に、東海道を大名や朝鮮通信使・琉球使節などが往来しましたが、その場合、周辺地域には助郷役という交通補助の義務が課せられ、農村には重い負担になりました。平塚宿の負担を市域で担当することがあり(71〜76ほか)、その厳しさを伝えています。

**第三章「水と村々」**では相模川をはじめ、市域をうるおす大小河川に関する資料が集められています。農業生産に立脚していた近世社会では、河川管理がすべてに優先するといっても言い過ぎではありませんでした。市域の旧村名には、川入、棚沢、七沢、上・下古沢、温水、及川、長谷など、水と人との親近性



万延元年(1860)10月「道中入用控」(神崎 正陳氏蔵)  
上荻野村神崎氏奥州宮古行道中入用控帳(4章27参照)  
岩手県宮古市鉾ヶ崎や角力浜に滞在した記録が残る。

を示す地名が少なくありません。この章では、地味ながら川普請(1〜25ほか)、取水口の修築(33・34)などの水利事業や、水争い(48〜51ほか)といった切実な課題が並んでいきます。さらに早魃や富士山の噴火に伴う降砂除去(87〜94)など、自然災害に対する農民の苦闘のあとが記されています。

**第四章「さまざまな生活」**では、昔から厚木の名産であった鮎の漁(3)、七沢地区の石材業や鋳物業(8ほか)、醸造業(20および参考資料)などの姿が伝えられています。石材加工には遠く信州高遠の職人たちが出稼ぎで来訪し(5)、技術交流を前進させたことでしょう。そのほか、農間に行なわれたいろいろな生業も紹介されています。農地に縛り付けられていた、という後退したイメージとは異なる農村の暮らしがわかります。本章で注意をひくのは、幕末期に奥州宮古方面まで出かけた人物の道中控え(27)で、訪問先での出費を克明にして貴重な旅の資料になっています(上段図版参照)。

**第五章「幕府の施策と村々」**では、主に江戸後期の幕政と厚木との関わりが取り上げられ、組合村・関東取締出役(5・6・13・14)・火付盗賊改役からの通達や、巡見使が来訪した際の応対(54・55)など、平時とは違う緊張が感じられる様子が再現され

ています。特に荻野に巡見使を迎えるにあたっての心得書き(61〜63)は、受け入れ側の服装・食事・用具に至るまでの具体的な描写が迫力を感じさせます。

遙かな昔から多くの人びとが厚木を生活の舞台にしてきました。その営みを支えたのは豊かな物資の移動や集積でした。しかし移動したのは目に見える物だけではありません。新鮮な情報や技術も行き来しました。それを可能にしたのは丹沢山塊を背に相模川を正面に擁する地勢と、生活力に満ちた人々の存在です。近代をも先取りするようなその姿をぜひ本書で追体験してみてください。もちろん資料集という性格上、すべてが読みやすく、わかりやすいというわけではありません。しかし難しい文書が活字化されたことで、今まで見えなかつた時代相に光が当てられるようになりました。この、骨の折れる資料収集・編集・解説などに当たられた先生方の御労苦、中でも、故飯田孝先生の業績に深い敬意を払いたいと思います。

冗長な駄文の最後になりましたが、近世資料全六冊の上に描かれる通史編の刊行を心待ちにしながら、つたない紹介の筆をおかせていただきます。

# 近世資料編を読むために(1)―はじめに―

厚木市史編集委員会近世編部会

部長 神崎彰利

周知のように、厚木市史のうち近世資料編は平成二十三年三月、全六巻を刊行し終了しました。最終の(6)村むらと生活について筆者としては、記録性を重視した従来に無い資料集であると自画自賛(乞無礼)しています。

全六巻刊行終了に当たり、市史編さん担当からこれら「資料編を読むに当たって」との名題で、市民の方々の利用に際し、少しでも利用の参考になるようなものを書け、との厳命を受けました。筆者にこの難問がふりかかったのは、全六巻編集にかかわった担当者のうち、

飯田孝氏の死去でした。長年月を要したことは、それだけ「慎重に」を意味し、また行政当局がそれを認めたという、市側の文化に対する意識の現れをも意味しています。

それともう一つは、近世資料編全六巻という巻数です。県下あるいはより広く、市の規模で近世資料編全六冊というのは私達の厚木市だけで他に例はありません。この事実は何を意味するかということですが、一言でいうならば、厚木にはすぐれた近世の地方文書が伝存していることの証明です。

筆者はこれまで神奈川県史の調査・執筆をはじめ、県内外の地誌編さんに参画しましたし、個人的な研究上多くの地誌の近世資料編の検討をして来ましたが、そうした立場からみて厚木の近世資料編全六巻の在るべき姿というか、それを生み出した現存文書の量と質は特記できます。たとえば平成十五年刊行の近世資料編(3)文化文芸を見て下さい。これなどは厚木ならではの性格を具現しています。

今後筆者は、全六巻を適宜対象とし、筆者の気づいたテーマで資料編にせまります。その第一回は「厚木で最も古い近世文書」と題してその紹介をしますが、時には少し面倒な近世の古文書学にふれるかも知れませんが、あらかじめこの点をご了承願います。

## 編集後記

『厚木市史たより』第二号をお届けいたします。海老名市温故館職員で同市史編集補助員の片山兵衛氏には、生活力に満ちた人々を生んだ厚木市の豊かな自然や物資・人々等の交流の様子が読み込むことができます。『厚木市史』近世資料編(6)村むらと生活を御紹介いただき、市史編集委員の神崎彰利氏には、厚木市史の誕生から携わってこられたお立場から、近世資料編について語っていただきました。今後は具体的なテーマに沿っての連載がスタートします。どうぞご期待下さい。

東日本大震災から四か月が経とうとしています。私たちに出来ることは、経験したことを記録し、子孫のために伝えていくことだと思えます。『厚木市史』にも災害関係資料が収録されています。市史編さん事業は、私たちの過去を知り、また、先人の守ってきたものを次の世代につなぐ大切な作業です。この『厚木市史たより』で、市史編さん状況や、新しく発見された興味ある資料の紹介等を通じて、厚木市の魅力をアピールしていきたいと考えています。

(石川記)

## 厚木市史たより 第二号

平成23年7月1日発行

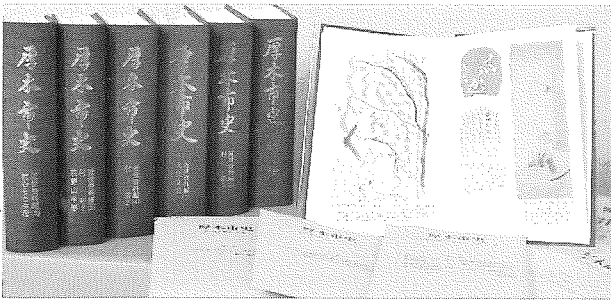
編集 厚木市教育委員会文化財保護課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町3-17-17

電話 〇四六-二二五-二〇六〇

FAX 〇四六-二二三-〇〇八六



『厚木市史』近世資料編 全6冊